

「教育する父」の意識と行動

— 中学受験生の父親の事例分析から —

多 賀 太

1. 「教育する父」の時代

1960年頃に誕生した「教育ママ」という言葉(本田2000)に象徴されるように、少なくとも高度成長期半ば以降の日本では、家庭教育を司るのは一般に父親ではなく母親であると見なされてきた。確かに、しつけ、生活体験、スポーツ活動などの文脈において「父親の出番」が語られることは以前からあったし、1990年代末頃からは乳幼児期の子どもの「世話」への父親の参加が叫ばれるようになったが、受験に直結する学業面の支援に父親の積極的な参加が求められることはこれまでほとんどなかった。

ところが、2000年代に入った頃から、サラリーマン向け商業雑誌を中心に、学業面、とりわけ中学受験支援に積極的に参加する父親を紹介したり、父親に受験支援への参加を促したりする記事が散見されるようになってきた(多賀2010、天童・高橋2011)。確かに、次節で詳述するように、全国的に見れば中学受験をする家庭は少数派であるし、中学受験家庭でも依然として父親よりも母親が主導権を握る傾向が強い。しかし、「父親の育児参加」が叫ばれるようになって10年以上が経過し、子育ての長期化と子育て水準の上昇が指摘される(広田2006)なか、父親による学齢期の子どもの学業支援への関与の度合いが増してくることは十分に考えられる(神原2001、石川2004)。

そこで本稿では、近年になって新たに注目されはじめた「教育する父」の一例として、子どもの中学受験支援に関与する父親に焦点を当てる。彼らの行動と意識の特徴を明らかにするこ

とは、従来の父親の子育て研究の「空白」を埋めるとともに、当該研究分野の射程を広げる1つのきっかけになると考えられる。加えて、彼らの行動と意識の特徴の解明は、次の2つの研究領域にも独自の示唆を与えるものと思われる。

第1に、階層と教育研究の領域である。そもそも、親の教育意識に関する調査では、結果的に回答者の大半が母親になってしまうことが多い(Benesse教育研究開発センター2008)。父母をペアで調査したデータを用いて家族の「教育戦略」という観点から階層再生産のプロセスを明らかにする試み(片岡編2008)も見られるが、そうした「戦略」研究においても家族が最小単位とみなされることが多く、父親個人に焦点を当てた分析はそれほど行われてはいない。また、従来の量的分析においては、子どもの教育・職業達成を説明する変数の中に父親の職業階層や学歴が含まれることは珍しくなかったし、近年では父親の期待が子どもの教育・職業達成にもたらす影響を明らかにする試み(藤原2011)も見られるが、父親の教育期待や教育資源が具体的に父親たちのいかなる実践を通して子どもに伝達・譲与されているのかについては、十分には明らかにされていない。こうしたなかで、中学受験に関与する父親の行動と意識の特徴の解明は、父親のもつ教育意識や教育資源が子どもの地位達成に作用するプロセスの示唆につながる可能性がある。

第2に、中学受験支援に関与する父親の研究は、社会のジェンダー構造に関する研究に対し

ても意義をもつと思われる。彼らは、主として都市部に在住し、より多くの経済的文化的資源を有する、相対的に恵まれた層の男性であると考えられ、全国的に見れば一部の層に過ぎない。しかし、そうした層の男性たちは、R.Connellのジェンダー理論における「ヘゲモニックな男性性 hegemonic masculinity」(権威と結びつき、他の男性性に比べて優位に位置づく男性性のパターンであり、男性支配の正当化戦略が具現化したもの)(Connell 1987=1993, 1995)を体現する集団であると考えられる。そうした集団の内部で、中学受験支援に象徴される新たな実践が展開されているのだとすれば、彼らの実践や意識のあり方の詳細を明らかにすることは、階層的支配集団の再生産戦略のみならず、階層構造およびジェンダー構造が重なり合うなかで支配的位置を占める男性集団によるヘゲモニー保持のための戦略を読み解くための手がかりにもなると考えられる。

以上の問題意識に基づき、本稿では、子どもの中学受験支援に関与してきた父親の事例分析を通じて、彼らの受験支援行動と受験に対する意味づけの具体的な様相を明らかにし、それらが現代の日本社会における階層構造とジェンダー構造の再生産過程といかなる関係にあるのかを考察する。以下では、まず前半で、先行研究の動向(第2節)と調査の概要(第3節)について述べ、ある父親の事例を通して父親の受験支援行動と教育意識の実態を具体的に示す(第4節)。続いて後半で、その事例を柱に据えて他の事例も参照しながら、彼らの教育意識(第5節)と受験支援行動(第6節)の構造と諸特徴を考察し、最後にまとめを行う(第7節)。

2. 中学受験と中学受験研究の動向

中学受験に関与する父親に焦点を当てた研究はほぼ皆無に等しいが、中学受験の事態とその背景に関する研究には一定程度の蓄積があり、

中学受験率の推計、受験増加の背景の考察、受験の規定要因の解明などが行われている。

文部科学省学校基本調査によれば、2010年度現在、全国に10,815の中学校があるが、そのうち公立が9,982校(92.3%)と圧倒的多数を占めており、国立が75校(0.7%)、私立は758校(7.0%)である(文部科学省2012)。また、2007年度に私立中学に進学した中学生の割合は、全中学生の7.1%であり、ほぼ14人に1人の割合となっている(Benesse教育開発センター2008:232)。

中学受験には、これまで2度のブームがあったとされている(森上2009:9-12)。第一次ブームは、首都圏の大手学習塾による小学生囲い込みの動きをバブル景気が後押しした1990年前後である。ある大手学習塾の推計によると、1987年から1991年の4年間で、首都圏における受験率は8.0%から12.8%とほぼ1.5倍になったとされている。これと平行して、1987年に3.1%だった全国の私立中学校生徒の割合は年々増え続け、1995年には5.2%と5%台に到達した(Benesse教育開発センター2008:232)。この時期には、私立中学校が、①キリスト教系女子校を典型とする鮮明な個性をもった「スクールカラー校」、②大学ないし短大までほぼ自動的に進学が保証される「エスカレーター校」、③大学への進学準備を主な目的とする「六年制進学準備校」へと分化しつつあることや、一部の階層集団向きか国公立校の補完にすぎなかった私立が、中間層の膨張と消費文化の進展によってより広い層に開かれると同時に、より威信の高い大学を目指す選抜競争においてより優位な位置を獲得するようになっていくことが指摘された(天野1990)。

これに対して、第二次ブームにあたるのが、一旦沈静化した受験率が再び上昇し始めた2000年以降である。首都圏では、1990年代に12~3%台で推移していた中学受験率は、2000年代になって急激に上昇し始め、2008年には20%を超え

たと推計されている。2009年から受験率がやや低下している傾向が見られるが、それでも2010年には首都圏の小学6年生の少なくとも6人に1人以上が受験していると見積もられている(Benesse教育開発センター2008:232;Gakken2012)。

ただし、中学受験率ならびに私立・国立中学に通う生徒の割合の地域差は非常に大きい。2007年に行われた全国調査によると、東京23区では、小学6年生をもつ家庭のほぼ4分の1(24.9%)が私立・国立中学の受験を考えていた。公立中高一貫校まで含めた中学受験を考えている家庭となると、東京23区では37.7%にもなっていたが、全国平均では13.2%であった(Benesse教育開発センター2008:26,223)。こうした中学受験率の地域差には、居住地から通える私立・国立中学の数の違いが大きく関わっていると考えられる。「居住地には子どもが1人で通える範囲に私立中学がない」と答えた保護者の割合は、東京23区在住者では2割以下であるのに対して、政令指定都市および人口15万人以上の市在住者で約3割、人口5~15万人の自治体在住者では約5割、人口5万人未満の自治体在住者では7割以上となっている(同24)。また、都道府県別で見ると、東京では、2007年度に私立中学に通う生徒の割合が26.5%と極端に高くなっているが、東京を除けば、その割合が10%を超えているのは、神奈川、京都、大阪、兵庫、奈良、広島、高知の7府県にとどまっている(同223)。

中学受験増加の背景としては、公立中学校の教育の忌避や不信と、私立・国立中学校の教育の積極的評価という両面からさまざまに論じられている。公立教育の忌避や不信の背景として指摘されてきたのは、学校の「荒れ」、学校群・合同選抜の導入、学習指導要領の縛り、「ゆとり教育」、大学受験に不利なイメージなどである。一方、私立・国立中学の積極的な評価とし

て指摘されているのが、高校受験の回避、伝統的校風の支持、大学受験に有利なイメージ、受験知と受験勉強自体への評価などである。さらにそれらを取り巻くマクロな社会的環境として、進学塾の経営戦略展開や市場化とプライベート化の広がりなどについても論じられている(樋田1993,1998,Benesse教育開発センター2008,片岡2008,森上2009,小針2008)。

受験の規定要因に関しては、居住地の違いや本人の成績の良さに他に、世帯収入が多い家庭、「暮らし向き」が上位である家庭、保護者の学歴が高い家庭のそれぞれにおいて、そうでない家庭に比べて中学受験をする割合が高いことが指摘されている(Benesse教育開発センター2008,樋田1993)。

こうしたなか、全国調査のデータからは、通塾や中学受験の意思決定においても実際の受験支援行動においても母親がイニシアティブを取っているという一般的傾向のなかにあって、私立中学を受験しようと考えている家庭に限れば、父親も教育情報の収集により積極的であり、勉強を教えたり社会の出来事について子どもと話したりする割合は母親よりも父親で高くなっていることがうかがえる(Benesse教育開発センター2008:41,91-92,126)。

ところが、面接等を用いて中学受験に関わる親の意識や行動の具体的な実態を明らかにしようとする試みとなると、母親を対象とした研究はいくつか見られる(本田2008,片岡編2008,Benesse教育開発センター2008)のに対して、父親を対象としたものとしては、商業雑誌の取材記事(多賀2011参照)や中学受験に関わった父親の手記(高橋・牧嶋2003,高橋2007,増田2007)が見られるのみであり、学術的にアプローチしたものはほとんど見られない。

3. 調査と分析の方法

そこで筆者は、子どもの中学受験に積極的に

関与する父親の行動と意識の詳細を明らかにすべく、そうした父親を主な対象とする面接調査を実施した。2009年11月～2011年12月の間に、私立または国立の中学校を受験したか近々受験しようとしている子どもをもつ15家庭の親（父親13名と母親2名）に対して面接を行った。対象者の選定には機縁法を用い、父親についてはできるだけ子どもの受験支援に比較的関与してきた人に協力を依頼した。また、中学受験事情が地域によって大きく異なることから、首都圏、関西圏、九州・沖縄地方のそれぞれに居住する対象者を募った。

面接に際しては「対象者および配偶者の生活史と生活構造」「中学受験の経緯」「受験支援の具体的な様子」「教育意識と子育て参加の変遷」などの主な質問事項に回答してもらいながら比較的自由に語ってもらう半構造化面接の手法を用いた。会話は対象者の了承を得てすべて録音した。面接時間は最も長いケースで121分、最も短いケースで52分、平均約68分であった。

本稿における分析に際しては、15名のうち、インタビュー時の事情から基本的情報が不足している1名と、対象者の子どもが私立小学校から「エスカレーター」式に系列中学校に進学した1名を除く13名を対象とした。分析は次の手順で行った（佐藤2008参照）。事例ごとに、1) 会話の内容をすべてテキスト化し、2) テキストをセグメント化（基本的要素に分解）しながら、3) 各セグメントにコード（小見出し）を割り振った。そして、4) 全13件の事例を縦軸、各コードを横軸とする「事例——コード・マトリックス」を作成し、5) 元のテキストとマトリックスの両方を参照しながら、各事例間での共通点と相違点を析出する横断的分析、ならびに各事例固有の文脈を重視した個別事例分析を行った。

表1は、分析対象の13名の主な属性を示したものである。本サンプルでは、半数以上の家庭で子どもの受験時には母親が家事専業であり、

母親がフルタイムで就労していた唯一の家庭でも子どもの受験時に母親は末子の育児休業中であった。ただし、全国の小学6年生の母親のほぼ4人に1人が家事専業であり、フルタイム就労は2割に満たないという調査結果（Benesse教育研究開発センター2008:11）や、子どもの教育のためにフルタイム就労ではなく家事専業やパートタイム就労を選ぶ母親が少なくない（本田2008:120-159）との指摘をふまえるならば、本サンプルは、中学受験家庭の母親の就労状況の点でそれほど偏ったものではないと考えられる。

次節では、対象者のうち、本稿の後半で考察の対象とする諸特徴が最も端的にうかがえるモトキさん（仮名、以下同様）の例を取り上げ、父親たちの受験支援行動と、中学受験や自らの支援行動に対する父親たちの意味づけの具体的な様子を示す。なお、次節以降で対象者の語りを引用する際には、発言の趣旨を曲げないことに注意を払いながら、括弧で言葉を補ったり語順や語尾を改めたりしている場合がある。

4. 事例研究

(1) プロフィール

モトキさん（事例2、番号は表1に対応、以下同様）は、40歳代後半で、新聞社に勤務しており、息子が1人いる。息子は、首都圏で私立中高一貫男子校の「御三家」と呼ばれる最難関進学校うちの1校を前年度に卒業し、大学受験を目指して浪人中であった。

モトキさんは、東京都内で生まれ、小学校高学年のときに父の転勤で東海地方の小都市に引っ越し、高校卒業までそこで過ごした。父は中卒で製造業の現業職に就いていた。母は高卒で看護婦の仕事を断続的に行っていた。

父親から「勉強しろ」と言われたことは一度もなく、家庭は教育熱心ではなかったというが、幼少期の家庭の教育環境に特に不満をもつ

表1 対象者一覧

事例番号	仮名	子ども受 験時の主 な生活圏	父親の属性				母親の属性					
			面接時 年齢	子ども期 の主な 生活圏	中学受 験経験 の有無	最終学歴	子ども 受験時の 職業	面接時 年齢	子ども期 の主な 生活圏	中学受 験経験 の有無	最終学歴	
1	アツシ	首都圏	40代前半	中四国 地方	無	関東地方 大学院修了	シンクタンク 研究員	40代前半	中四国 地方	無	関東地方 短大卒	航空会社社員 (育休中)
2	モトキ	首都圏	40代後半	東海地方	無	関東地方 大学卒	新聞社勤務	40代後半	首都圏	無	関東地方 大学卒	家事専業
3	セイジ	首都圏	40代前半	首都圏	無	関東地方 大学卒	食品メー カー 勤務	40代前半	東北地方	無	東北地方 短大卒	家事専業
4	トシコ(母)	首都圏	40代前半	中四国 地方	無	関東地方 大学校卒	航空会社 勤務	40代前半	中四国 地方	無	関東地方 大学卒	自由業 (短時間)
5	ミキ(母)	首都圏	40代後半	中四国 地方	無	関東地方 大学卒	医師	40代前半	中四国 地方	無	関東地方 大学卒	薬剤師 (パート勤務)
6	ケイジ	関西圏	40代後半	関西 都市圏	有	関西地方 大学卒	小売業 (家業)	40代後半	関西地方	無	関西地方 短大卒	家業手伝い
7	ミチオ	関西圏	40代後半	九州地方	無	九州地方 大学卒	大学教員	40代後半	九州地方	無	九州地方 短大卒	家事専業
8	ツネオ	関西圏	50代前半	関西 都市圏	無	関西地方 大学卒	機器メー カー 勤務	40代後半	関西 都市圏	無	関西地方 短大卒	家事専業
9	イクオ	福岡 都市圏	50代前半	福岡 都市圏	有	海外 大学院 修了	大学教員	50代前半	福岡 都市圏	不明	九州地方 大学卒	講師 (パート勤務)
10	コウスケ	福岡 都市圏	40代前半	福岡 都市圏	無	九州地方 大学卒	病院勤務 (非医療系)	40代前半	関西地方	不明	地方不明 短大卒	職種不明 パート勤務
11	ジロウ	福岡 都市圏	40代前半	福岡 都市圏	無	関東地方 大学卒	福祉系団体 職員	40代前半	福岡 都市圏	有	九州地方 短大卒	家事専業
12	ヨシト	九州地方 都市	50代前半	九州地方	無	九州地方 大学院 修了	大学教員	40代後半	九州地方	無	九州地方 専門学校 卒	家事専業
13	ハルキ	沖縄県	40代前半	沖縄・ 九州地方	有	関東地方 大学卒	レジャー企業 (家業)役員	不明	沖縄地方	不明	沖縄地方 大学卒	家事専業

ているわけではない。彼は、公立の小中学校を卒業後、学区で進学実績トップの公立普通高校に進んだ。特に立身出世志向はなかったが、高校で進学校に入った以上は、中途半端な勉強をして「どこにあるのかわからないような大学」に入るくらいなら就職した方がましだと思い、かなり頑張って勉強したという。卒業後は、一浪して東京の難関国立大学に合格した。

大学卒業後、一旦は別の会社に勤めたが、本来やりたい仕事をやらせてもらえなかったこともあり、2年後に現在勤務する新聞社の試験を受けて転職した。新聞社に入社後は、関東から九州までの各地を数年おきに転勤し、配属される部署によって勤務パターンも大きく異なった。地方の支局で24時間体制のもと「夜討ち朝駆け」をすることもあれば、自分で取材先を見つけてきたり本を読んだりしながら記事を書くことが中心の場合もあった。また、編集部門で昼に寝て夜に仕事をする勤務パターンが続くこともあれば、家族を関東地方の自宅に残して地方に単身赴任をした時期もあった。これまで、総じて時間的空間的に拘束される度合いの高い働き方をしており、十分に子どもと接する時間がとれなかったこともしばしばであった。

妻とは、ちょうど転職した頃に結婚した。彼女は彼とほぼ同い年で、公立の小中学校を卒業後、ある私立女子大学系列の「エスカレーター校」に入学し、そのまま系列大学に進学した。彼女は、大学卒業後に民間企業に勤めていたが、彼の転勤にともなって自らの通勤が不便になったため退職した。彼は彼女に、通勤しやすい支店に配転を願い出たらどうかと勧めたが、彼女は仕事よりも子育てに専念したいとのことであった。

(2) 当初の教育意識と中学受験の経緯

モトキさんは、自分の子どもにどうなってほしいという明確なイメージを持っているわけで

はなく、教育熱を前面に出しながら子どもの教育に携わってきたわけではない。今も昔も、息子が将来どのような人生を歩むかは、親ではなく本人が考えることであり、「考えるための、何か道筋みたいなもの、ものを考えるっていうのはこういうことなんだって、そういうことさえ親は教えてやればいい」と思っている。

彼は当初、息子を中学受験させようなどとは考えてもいなかった。というよりも、私立中学を受験すること自体によい印象を持っておらず、むしろ公立学校での教育を評価していた。

僕は基本的に、その当時は、学校なんていうのは上から下まで公立でいいんだと、本人の努力次第でどうにでもなる、みたいに思ってた。僕自身がそうだったので。基本的には私立の学校を受けることとかには反対だったんです。

政治家の子どももいれば、やくざの子どももいる。実社会ってそういうものだから。(息子には、)世の中にはいろんな人がいて、そういう人たちとどう折り合いをつけていくかをちゃんと考えられる人間になってほしいと思っていました。だからこそ、僕は公立の学校へ行ったほうがいいんじゃないかと思ったんですね。

ところが、小学4年生になったとき、息子が私立中学を受験したいので塾に行きたいと彼に言ってきた。息子はまず母親に相談していた。彼女は、息子の考えに内心は賛成だったが、父親がそうした考えに否定的であることは知っていたので、父親に相談させたようだった。

息子が受験をしたいと思うようになった直接のきっかけは、仲の良い友人たちが3年生の2月頃から塾へ行き始めて遊び相手がいなくなってきたことだった。それに加えて、学校の授業

が簡単すぎて退屈だったことと、ちょうどその頃学級崩壊のような状態になっていたことも、受験を考えるようになった要因の一部だったようである。

彼は、当初は息子を塾に行かせるつもりはなかったが、本人が行きたいというのに行かせない理由もないと思ったので、絶対に塾をさぼらないことと、彼自身は基本的に勉強を見ないことを条件に、塾に行くことを許可した。こうして彼の息子は、周りの友人たちより少し遅れて4年生の5月に入塾した。

(3) 中学受験に対する意味づけの変化

塾に行きだしたことで、妻はすっかり息子を私立中学に入れるつもりになっていたが、彼は、もともと中学受験には反対だったこともあり、しばらくの間は「基本的には子どもの選択だから親が尻をたたいてまで私立中学校に入れる必要はない」という考えだった。

ところが、その後彼の中で、息子を私立中学に行かせることを肯定する気持ちが徐々に高まってきた。その最も大きな要因は、公立学校の教育に対する強い不信感を抱いたことである。

僕は首都圏で子どもを育ててみて分かったんですけども、首都圏って、大体ね、小学校から中学校に上がる時に、上位2割から3割ぐらいの子が私立へ抜けるんですよ。それもあって、やっぱり公立の中学は荒れがちだったんですね。僕の息子がそのままであれば上がっていく学校も、あんまりいい評判が当時はなかった。

このように、当初は、公立学校は多様な子どもが通うところだと思っていた彼だが、次第に、公立学校は「上位」が抜けた後の子どもたちが通うところだと認識するようになった。さらにそこへ、教師の指導力や親に対する不信感

も加わってくる。

僕自身も中学の時は、ものすごく校内暴力で荒れてる中学校に通ったんで、まあ、(公立中学でも) 何とかなることはなるんでしょけど、教師に問題解決能力がなかったらどうしようもないだろうと思ったんですよ。……うちの息子は、(小学校) 6年間のうちに3年間、あまりいい言い方ではないんだけど「質の悪い」先生に当たってしまった。これはひどすぎると思ったんですよ。

参観授業を見てて、親のレベルが「激下がり」してるって思ったんですよ。親って普通、授業参観だったら後ろで立って見てるだけなもんでしょ。それが、子どもが何かもたもたしてると、親が授業中にね、そこへ行っていきなり教え始めちゃったりとかね。教室の出入りするのにあいさつしない親も結構いたわけですよ。

こうして彼は、当初の公立学校の教育に対する肯定的評価を180度転換させるに至った。

今の時代ね、公立中学に子どもを行かせるっていうのは、かなり冒険だと思いました。やっぱり公立の学校が、もうはつきり言って駄目だなんて思ったのが、自分は最初反対していた中学受験に、結果的に協力することになった原動力の一番大きなものだと思います。

(4) 受験支援の様子

ところで、全事例の横断的な分析から、親による中学受験の支援活動は、「学校選択支援」「受験勉強支援」「受験生活支援」という3つのカテゴリーで把握することができた。モトキさ

んは、これらのいずれにも可能な限り熱心に関わってきた。

まず、「学校選択支援」について、自らの考えが息子の中学受験を許容する方向に変わってくると、今度は息子をどのような学校に行かせようかと考えるようになってきた。それで、息子が5年生になると、中学受験の情報誌などで各学校の特徴や受験の傾向を調べて、文化祭や学校説明会などにかなり足繁く通い、妻や息子と、どのような学校に行きたいか、どのような学校に行かせたいのかについてよく話し合った。幸いにも、息子の行きたい学校と親の行かせたい学校の方向性が同じだったので、受験校の選定にはあまり苦労しなかったが、今から思えば、中学受験を決めたことが、「何をするために学校に行くのか、家庭にとって教育とは何か」を家族の皆で考えるきっかけになった気がするという。

次に、「受験生活支援」についても、仕事で拘束されない限り熱心に関与した。息子が5年生のときから東海地方に単身赴任となったが、塾が終わるのが夜の9時半くらいになるので、単身赴任中も週末には自宅に戻ってきて車で息子を迎えに行った。また、6年生のときは、あちこちの大学などを会場としてほぼ毎週末に行われる模擬試験の送り迎えや付き添いをした。

そして、受験支援のなかで彼が最も精力を注ぎ込んだのが「受験勉強支援」である。先述のように、彼自身は基本的に勉強を見ないことを条件に息子の塾通いを許可したのだが、結果的にそうはいかなかった。特に算数については、5年生の2学期ぐらいから必要な家庭学習時間が長くなり、難易度が上がってきて、親の助けが必要になってきた。息子は、最初は母親のところに聞きにいらっていたが、母に「わからないのでお父さんに聞いて」と言われ、モトキさんに泣きついてきた。彼は、「約束が違う」といつかなり不満をあらわにしたが、塾の先生が

一人の生徒に長時間付き合っただけで教えるわけにもいかないことがわかり、仕方なく、少しずつ勉強を見てやるようになった。

一旦勉強を見てやるようになると、「教えるからには、中途半端に教えても時間の無駄」なので「本人が納得するだけの話はしなきゃいかん」と思い、一生懸命「予習」をするようになった。彼自身、中学受験をしたことがなく、「鶴亀算」などといわれてもわからない状況のなか、参考書などを買ってきて、解法を自分でマスターしていった。単身赴任中は、平日に職場で仕事の合間などに問題集を解き、週末に関東の自宅に戻った際に息子に教えていた。加えて、模擬試験の結果から息子の苦手な問題の傾向を分析し、苦手分野を克服するための手製の問題プリントを毎週作ったりもした。当時息子は、そうした献身的な支援についてモトキさんに直接礼を言うことはなかったが、母親にはモトキさんへの感謝の念を語っていたそうである。

ただし、そうして親身になって支援をするなかで、しばしば息子と感情的にぶつかり合うことも多かったという。

やっぱりね、親が子どもに教えるっていうのはなかなか難しいもので、かなりお互いに感情的になりました。……やっつけて言ったことをやらなかったりとかってことに対しては、僕はよく怒りました。「おまえ、これやっつけて言ったろ」とか、「何でやっつかないんだ、ばか」とか言ったりね。息子にしてみれば、身近にいる父親からは快くなかったみたいです。向こうも疲れたり、いらいらしてる時とか、ふてぶてしい態度を取るわけですよ。それに対してまた「それがおまえ、人に教わる者の態度か。お父さんは別におまえに塾に行けなんて

言ったこと一度もないだろう。勝手にやっているのにその態度は何だ」と。何かそういうことでよく叱りました。

(5) 受験支援と父親の役割

モトキさんは、決して世帯間の格差が広がっていくことを肯定しているわけではないが、現在の日本社会の仕組みが大きく変わらない限り、それは避けられないだろうと考えている。すなわち、「教育に金のかかりすぎる国」のなかで、一方で、高等教育を受けた者同士が結婚して経済的に裕福な家庭を築き、他方でフリーター同士が結婚して明日の生活もままならない世帯を形成する。そうしたことが、二世帯、三世帯続けば、世帯間の格差が広がっていくことは必然であると考えている。したがって、母親だけが教育熱心であるか父親も中学受験に積極的に関与するかという違いは、そうした格差再生産のプロセスにそれほど大きな影響を及ぼさないのではないかと思うという。

その一方で彼は、自分たちの世代あたりから、父親は「会社人間で家庭に無関心」ではいられなくなってきており、父親が受験支援に関わるようになるのもある種必然的な流れだと考えている。また彼は、父親の受験支援参加に、受験それ自体にとどまらない教育的な意義も見出している。確かに、父親が受験に熱心になることで子どもにプレッシャーをかける人間が1人から2人になっては困るが、基本的に、子どもの教育や将来については、母親だけが考えるよりも、父親と母親と両方で一緒に考えた方がよく、それによって「子どもがより自覚的、自発的、自立的にものを考えられるような環境が整う」のは望ましいと考えている。

このように、モトキさんは、中学受験支援をはじめとする父親の家庭教育への関与に一定の必然性や意義を認めており、彼自身もできる限り積極的にそこに参画してきた。それでも、受

験支援への関与によって仕事の時間が圧迫されることはほとんどなく、受験支援のせいで仕事に支障を来すことはなかったという。仕事はもともと大変で、仕事の空いた時間にしか受験支援はできなかったし、しなかった。息子が中学受験を決めたときから、「そもそも私が会社をクビになったら学費も出ない」のだから「できる限りの協力しかししない」ことを家族に宣言してきたのだという。家庭における唯一の稼ぎ手として、中学受験支援に積極的に関与していた間も、仕事と稼得責任は、彼のアイデンティティと父親としての役割の中心にしっかりと位置づいていたことがうかがえる。

5. 教育意識の構造と形成過程

では、これまで見てきたモトキさんの事例を柱に据えて他の事例も参照しながら、まずは、彼らの中学受験に対する意味づけを中心とした教育意識の構造とその形成過程について考察してみよう。

(1) 中学受験志向の構成要素 リスク回避志向

学齢期の子どもを持つ父親と母親を対象とした先行研究においては、小・中学校受験をする親の選択が公立学校の教育への不信を背景とした「教育的リスク回避戦略」としての性格を持ち合わせていることが指摘されている（片岡2008）。モトキさんの事例においても、彼自身による中学受験の決断は、私立学校の教育の積極的評価による上昇志向というよりも、むしろ公立学校の教育への不信に基づく「リスク回避」意識に支えられていた。こうした見解は、とりわけ自らは地方出身でありながら子どもを大都市で受験させた父親たちの語りにおいて顕著だった。四国地方の小都市出身で、首都圏で娘に中学受験をさせたアツシさん（事例1）は次のように語る。

東京では、今はもう（中学受験が）大衆化されているし、公教育に問題もあって、一部の限定された人だけじゃなくて普通の人もやらざるを得ないみたいな、そういう状況になっていますよね。基本的に、（中学受験は）何て言うのですかね、一種の保険みたいな発想ですよ。最低限ここに入れておけば、ここより下に落ちることはないだろうみたいな……。

アツシさんの語りに見られた「保険」という表現は、中学受験における「リスク回避」としての側面を見事に言い当てている。夫婦ともに九州出身で、関西圏で息子に中学受験をさせようとしていたミチオさん（事例7）も、自らの選択について次のように語っている。

周りがそこに乗ってる中で、自分だけ乗らないというのは、勇気がありますね。しかもそのリスクを、自分じゃなくて息子が背負わなければいけないということがありますので、そんな判断をほんとにできるのかという自信はないですよ。だから、乗っかってるほうが楽というところはありますね。

上昇志向

他方で、階層下降リスクの回避というよりも、むしろ積極的に階層上昇を志向して子どもに中学受験をさせているような例も見られた。今回対象となった父親たちは皆大卒か大学院修了の学歴を持ち、経済的にも比較的恵まれており、社会的威信の高い職業に就いているが、それでも、子どもに対して、学歴、職業の威信、「学力」などの点で父親を超えてほしいという希望を語る者もいた。

例えば、自営業のケイジさん（事例6）は、現在の収入に不満があるわけではないが、「や

りたい仕事」よりも「儲かる仕事」を優先して働いてきたことに満足できず、「したい仕事をして、人に感謝されて、それで収入を得て生活できる」医者や教師のような仕事にずっと憧れてきたので、2人の息子には医師か教師になることを幼少期から勧めてきたという。また、大学教員のヨシトさん（事例12）も次のように語る。

（子どもを、自分より）下降させたくないというよりも、上昇させたい。やっぱり、子は親を乗り越えるもんだという気持ちがありますから。

彼らに共通していたのは、かつての自分が置かれていた教育環境や学歴に満足していない点である。親が仕事で忙しく、親から勉強しろと言われたことがなかったという彼らは、それぞれ次のように語っている。

（自分は）中途半端な大学しか行けなかった……。言うとなんか負け惜しみになるけど、（親が）もうちょっと（勉強）せえ言うてくれたらしたのに、もっと言うてくれたらよかったのに、みたいな思いがあるんですよ。（事例6ケイジ）

小学校のときにもう少し教育熱心な所いたら違う人生があったかもしれない……。 （国立大学）附属中学に入れたかもしれない。（事例12ヨシト）

少なくともこうしたタイプの父親においては、自らの学齢期の教育環境や学業達成に対する不満が、子どもに中学受験をさせるという選択を後押ししている側面が認められる。

個性化志向

しかし、父親たちの間では、「リスク回避」や「上昇志向」といった垂直方向の軸の上でのより高い位置取りだけでなく、どちらかといえど水平方向に拡がる面の上での独自の位置取りを意識して、中学校への進学を積極的に意味づけている様子も見られた。

夫婦共にクリスチアンのジロウさん（事例11）は、競争の勝ち負けや、序列関係のなかでどの程度の位置を占めるかということよりも、「自分は自分と思えるような、自分自身のアイデンティティを保つ」ことができる人になれることを強く願って、娘にカトリック系の私立女子中学校を受験させている。また、セイジさん（事例3）も、高校・大学受験を気にせず子どもの好きなことを伸ばしてやるために、大学まで内部進学できるエスカレーター校を受験させたいとして、次のように語っている。

中・高時代っていわゆる人格形成期じゃないですか。そういう人生の中で重要な時期に、勉強をガリガリさせるんじゃないくて、勉強の中でも好きな分野を伸ばすとか、真ん中の子（長男）でいえば野球とか、好きなこととか伸ばしてやりたいなという気持ち強いんですよね。中学以降、好きなことを伸び伸びさせるために、小学校の時に我慢してやらせようというのが、そう（＝中学受験をさせる最大の理由）です。

エスカレーター校でも「将来満足のできるような大学の附属」でなければ「意味がない」と語るように、セイジさんも序列関係におけるより高い位置取りを意識している。それでも、彼らの志向には、垂直方向に他者よりも抜きん出る「卓越化」とは別次元の、水平方向で他者との差異化を図ろうとするいわば「個性化」（Benesse教育研究開発センター2008:19）の志

向を見出すことができる。

(2) 教育意識の再帰的形成

ところで、モトキさんの事例からは、彼の中学受験に対する意識が、中学受験の決断前から中学受験に至るまで一定であったわけではなく、外的な要因や偶然の出来事によって何度となく揺さぶられ、具体的な受験支援を実践していくなかで次第に中学受験を肯定する方向に明確化していっていることがうかがえる。これと似た意識の変化の過程は、関西圏のケイジさん（事例6）にも見られた。彼は、長男に対して、幼いときから医者になってほしいこと、医者になるためには進学校に行った方がよいことを言い続けてきたが、それでも当初は、彼自身が卒業した地元の公立中学から公立高校へという進路を長男もたどるものだと思っていた。しかし、長男が小学4年のときにその公立中学が「荒れて」、生徒が新聞沙汰になるような事件を起こしたことがきっかけで中学受験を考えるようになった。そして、一旦中学受験を考え始めると、「ゆとり教育」の問題、公立学校の教員たちの間に見られる「むら」（優れた教員とそうでない教員の差の大きさ）、給食費の未払いや校則違反がまかり通る現状など、公立学校の教育環境の問題が気になり始め、私立学校の教育を積極的に評価するようにならなくなっていったという。

他方で、中学受験を決断した後も、その決断の適切さについて折に触れて問い直している例も見られた。高校・大学受験のための勉強を避けてのびのびと育てたいとの考えから、面接時に小学6年の長女と小学5年の長男に中学受験をさせようとしていたセイジさん（事例3）の場合、成績が伸び悩んだときにつらそうな様子をしている長女を見てみると、「親の考えで、12歳の子どもにこんなに勉強させて、かわいそうなことしてるかな」と思う瞬間があるという。また、夫婦ともに九州で生まれ育ち、小学6年

の長男を関西圏で受験させようとしていたミチオさん（事例7）も、「まっぴらごめん」と思っていた「都会の受験戦争に巻き込まれ」てしまったが、「ほんまにこれでええんやろうか」「あまり極端な方向には走りたくない」という思いは夫婦で共有していると語っている。

さらに、中学受験に対する夫婦の考え方が受験時まで一致しないままにどうにかバランスを保って受験を乗り切ってきた家族も見られた。トシコさん（事例4）は、息子が3年生になって塾に行き始めたときからずっと中学受験をさせたいと思っていたが、夫は、「受験したいのならしてもよいが、自分が積極的にその支援をしてまで私立中学に行く必要はない」とのスタンスを最後まで変えなかった。彼は旅客機の機長であり、確かに仕事は忙しいのだが、時間があるときでもトシコさんに頼まれない限り支援をしなかったし、彼女も極力頼まなかったという。彼女は次のように語っている。

なぜ（頼まなかった）かということ、主人が忙しいのもあるけど、頼んで「そんなことをしなきゃ受験できないんだったらやるな」って言われるのが嫌だったの。だから、彼に受験のことで迷惑をかけたくなかったのかな。

最も中学受験率の高い首都圏であっても中学受験をする家庭は少数派であり、特に中学受験の拡大期には、中学受験を経験していない親が子どもに中学受験をさせるケースも珍しくない。また、自らが中学受験を経験しているかどうかにかかわらず、不合格への不安や不合格による挫折、親子・夫婦関係や子どもの発達への悪影響など、リスクを回避するために選択した中学受験にも、様々な別のリスクが付随している（片岡2008）。さらに、中学受験に関する父親と母親と子どもの意見が常に一致するとは限

らず、受験に際して家族内で異なる意向のすりあわせが必要な場合もある。こうしたなかで、中学受験を選択する親は、多かれ少なかれ、中学受験をさせる理由を自問し、中学受験に何らかの意味を見出そうとせざるをえなくなる。こうして、中学受験という実践は、自らの行動とそれに対する反省的な意味づけとの間のダイナミックな相互作用を伴って展開されるきわめて再帰的（reflexive）な実践としての性格を帯びてくるのである。

6. 父親の受験支援行動とその背景

モトキさんの事例においてもすでにふれたように、父親たちの受験支援行動は様々な側面にわたっており、すべての事例の横断的な分析から、それらを「学校選択支援」「受験勉強支援」「受験生活支援」という3つのカテゴリーで把握することができた。ここでは、それぞれのタイプの受験支援行動への父親の参加の仕方の詳細と参加を左右する背景について考察を行う。

(1) 受験支援行動の類型

学校選択支援

ここでいう「学校選択支援」とは、学校の情報を調べて子どもの適性や学力を勘案しながら受験校選択のアドバイスをするという類の行動である。先に見たように、モトキさんは、受験雑誌で学校の特徴を調べたり、候補に挙げた学校の文化祭や説明会に通って、妻や息子と相談しながら受験校の選定を行っていた。ただし、こうした「学校選択支援」における父親の献身的な関与が見られたのは、主として大都市圏に住む父親においてであり、地方在住の父親からはそうした様子はいかがえなかった。

「学校選択支援」への父親の関与の度合いに見られる大都市と地方の間の相違は、第2節で述べた、両者の間での通学可能な学校数の圧倒的な違いにあると考えられる。首都圏や関西圏

の場合、通学可能な何十校もの中から、入試難易度、カリキュラムや校風、通学のしやすさなど様々な面を勘案しながら受験候補校を絞り、入試日程に合わせてどの日にどの学校を受験するかといった入試スケジュールを念入りに組む必要に迫られる場合が多い。

それに対して、地方の場合は、もともと通学可能な私立・国立中学校の数が相対的に少なく、子どもの学力を勘案すれば受験校は自ずと少数に絞られてくるため、都市部ほどに親があれこれと情報収集をする必要がないと考えられる。例えば、九州の地方都市在住のヨシトさん(事例12)の場合、息子が小学校1年生のときから、公開模擬試験を受ける際には、現在通っている私立中高一貫校を第一志望欄に、別の国立大附属中学を第二志望欄に書いていたが、特に話し合わなくてもそれが本人と親との間での暗黙の合意だったという。また、いわゆる「スクールカラー校」に該当するカトリック系中高一貫女子校に娘を通わせている福岡のジロウさん(事例11)の場合、中学受験をすることを決めてからどの学校を受験するかを選択したのではなく、公立中学に進むかその女子校に進むかの二者択一であったという。

受験勉強支援

次に、ここでいう「受験勉強支援」とは、子どもに直接勉強を教えたり勉強のスケジュールや教材を作成したりするという支援行動を指している。先に示したように、モトキさんは、息子に問題の解法を教えるために仕事の合間に「予習」をしたり、息子の苦手な問題の傾向を分析して独自のプリントをつくってやったりしていた。

確かに、今回の対象者の父親全員がそこまで積極的に受験勉強支援に関与していたわけではない。コウスケさん(事例10)やヨシトさん(事例12)のように、塾が「親に勉強の負担を一切

かけない」という方針をとっているので直接勉強を教えることはほとんどなかったという人もいたし、ケイジさん(事例6)のように、最初は勉強を見てやっていたが途中で内容が難しくなったので教えなくなったという人もいた。

しかし、受験勉強支援に積極的だったのはモトキさんだけではない。例えばアツシさん(事例1)の場合、彼自身は文系科目、妻は理系科目、両親でカバーできない部分は家庭教師を雇うといった分業体制で、受験の最終段階まで直接勉強を教えていた。また、大学教員のミチオさん(事例7)は、持って帰ることのできる仕事は自宅に持って帰り、長男を塾に迎えに行って連れて帰った後、長男が勉強している横で仕事をしたり勉強を見てやったりしてきた。

中でも受験勉強支援に最も積極的に関与していたのが、当初から息子を中学受験させるつもりで受験支援を主導してきたハルキさん(事例13)である。彼は、息子を一人で勉強させるのではなくできるだけ付き添ってやりたいと考え、平日は毎日夜中の12時頃までマンツーマンで2～3時間一緒に勉強し、息子の休日に自分の仕事がある場合には職場に息子を連れて行き、個室で仕事をしながらその横で息子を勉強させていたという。特に算数には力を入れており、まず彼が予習をしてわかるようになってから長男に教えていた。彼自身、中学受験を経験しているが、その当時わからなかった問題もわかるようになるくらいまで予習をしたという。今でこそ、そうした勉強を通じて長男との絆が深まったと思えているが、やはり親子で感情的にぶつかり合ったモトキさんの場合と似ており、勉強を教える際にはお互いが怒鳴り合ったりしてまるで「戦争」のような状態だったという。

受験生活支援

受験支援行動の3つめのカテゴリーである「受験生活支援」とは、モトキさんの事例に見

られたように、子どもの通塾時の送り迎えや模擬試験時の付き添いなど、進路選択や受験勉強に直接関わらない、受験生活に必要な支援行動を指す。この受験支援活動についても、モトキさんに限らず、対象となった多くの父親たちが多かれ少なかれ関与していた。

塾の送り迎えについては、塾が自宅から近いので送り迎えは不要であるような事例も見られたが、車で送り迎えが必要であったり、夜の9時を過ぎて駅やバス停から子どもを1人で歩かせると心配であるなどの理由で、迎えに行く父親は多く見られた。例えば、ミチオさん（事例7）の場合は、長男の塾が終わる時間には、幼稚園児の次男はもう寝ているので、妻は次男のそばについておいて彼が長男を迎えに行くという分業体制をとっていた。ケイジさん（事例6）の場合、塾の送り迎えは主に彼が担当し、弁当作りは妻が担当するという分業体制が自然にできあがっていたという。

進路選択や受験勉強の支援が、様々な受験支援活動のなかでも相対的に華々しい「ハレ」の活動だとすれば、受験生活支援はより地味で目立たない「ケ」の活動（中谷1999参照）であるといえよう。受験支援の華々しい側面だけでなくこうした目立たない活動を父親が担うことが珍しくなくなっているという点では、父親の受験支援活動への関与は、家庭内の男女平等化の動きと連動していると思わせるかもしれない。ただし、彼らの事例に見られるように、受験生活支援においてさえ、より年少の子どもの世話や弁当づくりという家庭内での役割を母親が担い、送り迎えという家庭外の役割を父親が担うという点から見れば、受験支援活動内部にも「男は外、女は内」という分業体制が残存していると見ることもできるだろう。

(2) 父親の受験支援参加を促すもの

これらの事例から、子どもに中学受験をさせ

る家庭において、受験支援に積極的に関わる父親は、たとえ多数派ではないにせよ、決して珍しいタイプでもないと推察される。中学受験に関わる母親への面接調査からは、自らのライフスタイルも大切にしながら適度に子どもの教育に関わるかつての「ニューマザー」たちとは異なり、近年の「受験ママ」にはそうした余裕がなく「肉体労働」や「感情労働」の側面でも献身的である様子がうかがえるとされる（樋田2009）が、そうした献身的な受験支援への関与は、もはや母親だけに限られたものではなくなっているといえよう。

では、こうした父親たちの受験支援参加はどのように促されているのだろうか。少なくとも今回の事例からうかがえたのは、特に大都市圏においては、中学受験には家族の膨大な負担が要求され、母親一人の手ではもうまかない切れなくなってきたという点である。確かに、進学塾をはじめとする教育産業は、中学受験に必要な活動の大部分を代行するものである。しかし、そうしたサービスが提供された分だけ親の労力が軽減されるとは限らない。むしろ、そうしたサービスを十分に享受するために親のより一層のコミットメントが必要になるというパラドックスが見られる（平尾2004）。通塾に伴って送り迎えや弁当作りが求められ、より高度な学習を多く行うほど教材の整理やスケジュール管理が必要になり、学校や塾に関する情報が多く得られるほどそれらを収集、取捨選択して意思決定する労力が増えることになるというわけである。

東京、埼玉、神奈川を含む広範囲に位置する何十もの学校の中から受験校を4つに絞り込み、娘を第一志望校に合格させたアツシさん（事例1）も次のように語っている。

（中学受験の支援は）母親だけではちょっと難しいんじゃないですかね。（受験の）

最後の段階では特にいろいろな判断をしなくちゃいけない。出願から可否の発表から手続きから、いろいろ複雑なシミュレーションをしながらやっていかないといけないので、やっぱり父親の目というか、男の目の判断というのは絶対いるので。……これだけ中学受験をする人の率が上がっていった先鋭化し、塾や学校のいろいろな情報が飛び交うような状況になってくると、ちょっとお母さんが片手間でやりますというふうな、そういうものでもなくなってきているのでしょね。

もう1点、そうした受験に伴う負担の増大に連動して、子どもの地位達成が親の経済力と教育意識によって規定されるという「ペアレントクラシー」(Brown1990)の先鋭化を指摘することができるだろう。ペアレントクラシーの原則下で子どもにより高い地位達成を望むのであれば、親は子どもに最大限の経済資源と最大限の教育資源を投入することを目指すことになる。そこでは、父親が唯一の稼ぎ手として経済資源確保の責任を果たしていることは、父親が子どもの教育に参加しなくてよいことを保障しない。なぜなら、父親がどれだけ稼いでいようが、子どもの教育に関わる余裕があるのに関わらないことは、その家庭が持つ教育資源を最大限子どもに投入するという原則に反するからである(多賀2011)。特に、高学歴を元手として相対的に恵まれた職業に就いている父親たちは、メリトクラシー社会の勝者として多くの教育資源を有していることから、子どもに高い地位達成を望む家族において、そうした父親のもつ資源を利用しない手はない。こうして父親たちは、経済資源の確保という責務に支障を来さない範囲で最大限子どもの教育に関与するよう駆り立てられることになる。

父親の側にとっても、自らの持つ教育資源を

元手として子どもの地位達成を支援できるというのは、ある意味で「父親の権威」を妻子にアピールしつつ、子どもと深いつながりを形成できるチャンスでもありうる(多賀2010)。特に、アツシさん(事例1)が語ったように、娘の中学受験の場合、それが「娘と一緒に取り組む最後の事業」になるかもしれないという父親の思いが、受験への献身的な関与をさらに後押ししている側面もあるようだ。

7. まとめとインプリケーション

以上、子どもの中学受験支援に関与した父親の事例に基づき、彼らの受験支援行動とそれともなう意識の特徴について考察を進めてきた。最後に、そこから得られた知見を、関連分野の研究へのインプリケーションと合わせてまとめておく。

第1に、父親たちの受験支援行動は様々な側面にわたっており、それらは主として、学校の情報を調べて子どもの適性や学力を勘案しながら受験校選択のアドバイスをする「学校選択支援」、子どもに直接勉強を教えたり勉強のスケジュールや教材を作成したりする「受験勉強支援」、子どもの通塾時の送り迎えや模擬試験時の付き添いといった「受験生活支援」という3つの側面からとらえることができた。

第2に、先行研究における指摘の通り、父親たちの中には、中学受験をさせるという自らの選択に、公立学校の教育に対する否定的評価を背景とした「教育的リスク回避」としての意味を見出している者が見られた。しかし同時に、私立学校の教育のあり方を積極的に評価し、中学受験に、親の地位を超えるという「上昇」の手段としての意味を見出したり、水平方向に他者との差異化を図ろうとする「個性化」の手段としての意味を見出している父親も見られた。

第3に、上記のいずれのタイプの意味を見出しているかに関わらず、面接を行ったほとんど

の父親たちは、子どもに中学受験をさせる(た)という自らの選択が、そうした選択ができない世帯との教育格差の維持・拡大につながる可能性を認識しながらも、自らの選択を否定しておらず、多かれ少なかれそれを正当なものとして見なしていた。そうした中学受験支援という彼らの実践は、予め形成された意識によって一方的に規定された実践であるというよりも、むしろ自らの行動とそれに対する省察的な意味づけとの間のダイナミックな相互作用を伴って展開される再帰的 (reflexive) な実践であった。

これらの知見は、階層と教育研究、および社会のジェンダー構造に関する研究のそれぞれに対して次のような示唆を与えると考えられる。

第1に、階層と教育研究との関連で、こうした父親たちの行動と意識が階層間教育格差の縮小よりもむしろ維持・拡大に寄与しうるのは、改めて指摘するまでもないだろう。しかし、上記の知見が示唆するものはそれにとどまらない。これまで、統計的手法によって父親の子どもに対する教育期待が子どもの教育達成に一定の効果を持つことが確認されてきたが、本研究では、少なくとも子どもの教育達成に強い関心をもつ特定の層においては、そうした効果のある部分が「学校選択支援」や「受験勉強支援」といった父親の直接的な関与を介しても生じている可能性が示された。また、先行研究においては、「教育戦略」は概ね家族を最小単位として語られてきたのに対して、本研究では、そうした家族の選択行動を支える「戦略」は、必ずしも一枚岩の安定したものではなく、父親と母親と子どもそれぞれの異なる意向の間でのすりあわせが何度となくなされ、それによって時間と共に変化しうると、極めて多層的で動態的な性質をもつものであることが明らかにされた。これらの点に、家族の教育戦略については階層再生産のプロセスにおける変化の契機を見出すことも不可能ではないだろう。

第2に、上記の知見は、父親たちの中学受験支援行動が、現代日本社会のジェンダー構造がある側面では変化させながら、別の側面では維持・強化しつつあることをうかがわせるものである。中学受験支援に関与する父親たちの間では、客観的行動レベルにおいても、当事者の主観的認識においても、かつての〈扶養〉にはほぼ限定されていた父親の役割が、新しいあり方へと変化していることがうかがえた。船橋(1988)の整理を援用するならば、彼らは、「学校選択支援」や「受験勉強支援」という形での〈社会化〉のみならず、「受験生活支援」という形での〈世話〉、さらにはそうした活動を通じた子どもとの感情的なぶつかり合いや精神的絆の深まりといった〈交流〉に至るまで、受験支援活動を通じて親役割のあらゆる要素に関与していた。ただし、ほとんどの事例において、母親と父親の受験支援への関与の仕方は同様ではなかった。父親たちは、依然として〈扶養〉を最も重要な自らの役割と位置づけ、〈扶養〉役割を果たすのに支障のない範囲で他の役割を果たしていた。また、「学校選択支援」や「受験勉強支援」といった〈社会化〉役割の遂行が、母親と比較した場合の父親たちの権威を高めていることはあっても、決してそれを低めている様子はいかぬ。したがって、父親の受験支援参加は、ある一面では家庭内男女平等を促進する実践でありながらも、他方では、従来の母親役割の一部を取り込みつつ、より理想的で権威ある父親像・男性像を体現しながら、同時に次世代の階層下降を食い止めて首尾よく階層的再生産を成功させることで、ジェンダー関係においても階層構造においても優位に立とうとする都市在住高学歴中流階層男性の半ば無意識的な戦略が反映されたもの(多賀2011)と見なすこともできよう。そうした意味で、地方に対する大都市圏の文化的優位性を背景として、「教育する父」の像は、現代日本における「へ

ゲモノックな男性性」の構成要素の1つになりつつあるといえるかもしれない。

参考文献

- 天野郁夫(1990)「試験社会の新展開」天野郁夫・岩木秀夫編『変動する社会の教育制度』教育開発研究所、1-34
- Benesse教育開発センター(2008)『中学校選択に関する調査報告書』
- Brown, P. (1990) "The 'Third Wave': Education and the Ideology of Parentocracy," *British Journal of Sociology of Education*, Vol. 11, No. 1, 65-85
- Connell, R. W. (1987) *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics* (森重雄・菊地栄治・加藤隆雄・越智康詞訳『ジェンダーと権力』三交社、1993年)
- Connell, R. W. (1995), *Masculinities*, Polity Press.
- 藤原翔(2011)「Breen and Goldthorpeの相対的リスク回避仮説の検証」『社会学評論』Vol.62, No.1, 18-34
- 船橋恵子(1998)「現代父親役割の比較社会的検討」黒柳晴夫・山本正和・若尾裕司編『父親と家族——父性を問う——』早稲田大学出版部、136-168
- Gakken(2012)「首都圏中学受験ネット」<http://www.chu-j.com/> (2012年1月20日確認)
- 樋田大二郎(1993)「プライベート化と中学受験——英国の教育改革と日本の中学受験の加熱化——」『教育社会学研究』第52集、72-91
- 樋田大二郎(1998)「中学受験——市場原理の選抜過程による社会の要請と個人の希望の調整——」『子ども社会研究』4号、67-80
- 樋田大二郎(2009)「中学受験を巡る家庭環境の実態」森上展安『10歳の選択 中学受験の教育論』ダイヤモンド社、16-34
- 平尾桂子(2004)「家族の教育戦略と母親の就労——進学塾通塾時間を中心に——」本田由紀編『女性の就業と親子関係——母親たちの階層戦略』勁草書房、97-113
- 広田照幸(2006)「子育て・しつけ 序論」広田照幸編『子育て・しつけ』日本図書センター、3-17
- 本田由紀(2000)「『教育ママ』の存立事情」藤崎宏子編『親と子——交錯するライフコース』ミネルヴァ書房、159-182
- 本田由紀(2008)「『家庭教育』の隘路——子育てに脅迫される母親たち——」勁草書房
- 石井洋二郎(1993)『差異と欲望——ブルデュー『ディスタンクシオン』を読む』藤原書店
- 石川周子(2004)「父親の養育行動と子どものディストレス——「教育する父」の検証——」本田由紀編『女性の就業と親子関係——母親たちの階層戦略』勁草書房、133-147
- 片岡栄美編(2008)『子どものしつけ・教育戦略の社会学的研究——階層性・公共性・プライベート化』(平成17~19年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書)
- 片岡栄美(2008)「小・中学校受験にみる親の教育戦略」片岡栄美編前掲書、53-77
- 神原文子(2001)「〈教育する家族〉の家族問題」『家族社会学研究』第12巻第2号、197-207
- 小針誠(2008)「公立学校不信の構造——国立・私立小学校の選択行動に見る公立学校の『脱出』(exit)と『意見表明』(voice)——」『同志社女子大学学術研究年報』第59巻、107-118
- 増田晶文(2007)『父と子の中学受験合格物語』講談社
- 森上展安(2009)『10歳の選択 中学受験の教育論』ダイヤモンド社
- 文部科学省(2012)「学校基本調査」

- http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm (2012年1月27日確認)
- 中谷文美(1999)「『子育てする男』としての父親？」西川祐子・荻野美穂編『共同研究男性論』人文書院、46-73
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法』新曜社
- 高橋秀樹・牧嶋博子(2003)『中学受験で子どもと遊ぼう』文藝春秋
- 高橋秀樹(2007)『父と子の中学受験ゲーム』朝日新聞社
- 多賀太(2010)「『父親の家庭教育』言説と階層／ジェンダー構造の変化」『教育科学セミナー』第41号、1-15
- 多賀太(2011)「教育するサラリーマン——チューターとしての父親像の台頭」多賀太編著『揺らぐサラリーマン生活——仕事と家庭のはざままで』ミネルヴァ書房、127-157
- 天童陸子・高橋均(2011)「子育てする父親の主体化——父親向け育児・教育雑誌に見る育児戦略と言説——」『家族社会学研究』第23巻第1号、65-76

追記

本発表は、平成21～23年度科学研究費補助金(基盤研究C)の成果の一部である。